

に5mm以内、下顎骨で後方に5～10mm、PLLAプレートを用いた7症例とした。手術時年齢は18歳～32歳、平均年齢は23.1±4.0歳であった。

術直後(t1)および術後6ヶ月(t2)に撮影した側面頭部X線規格写真を計測して、上下顎骨の前後的な移動量の検討を行った。

【結果】SNAはt1で81.6±2.8, t2で82.7±3.0, SNBではt1で80.8±3.3, t2で81.6±3.1であった。どちらもほぼ後戻りは認めなかった。

PTM-Aはt1が48.8±4.3, t2が48.8±4.7, PTM-ANSはt1が52.±4.6mm, t2が52.0±4.5mmと、後戻り量はわずかであった。

Go-Meはt1で79.4±3.5mm, t2で78.8±4.7mmと、変化量はわずかであった。

McNamara to Aは術直後で1.8±3.6, 術後6ヶ月で1.1±2.9, McNamara to Pogは術直後で-1.4±0.9mm, 術後6ヶ月で-1.2±1.11と変化はわずかであった。

【まとめ】SNA, SNBの後戻り量が-1.1°, 0.1°, A点の後戻り量が0mmであった。これは葎葉らが報告したチタンプレート使用症例のSNA, SNBそれぞれの後戻り量1.2±2.3°, 0±1.7°, A点の変化量1.1±2.4mmと相違はなかった。Pogの後戻り量は0.7mm, ANSは0.1mmであったのに対し長谷部らが報告したチタンプレート使用症例のPogの後戻り量は0.9±2.9mm, ANSは0.2±1.8mmであり、明らかな相違はなかった。

近年当科における顎矯正手術は増加傾向にあるため、今後症例数を増やし、チタンプレートを使用した症例との比較、垂直的な後戻り量の変化、移動量と後戻り量の相関についても検討していく。

17) 各種隔壁法による修復コンポジットレジン の辺縁形態の違いに対する検討

○勝田 拓磨, 北原 海, 小鷲 啓典
野口 紗瑛, 菊井 徹哉, 山田 嘉重
(奥羽大・歯・歯科保存・保存修復学分野)

【緒言】臼歯隣接面に及ぶ窩洞に対する直接修復には隔壁が使用されるが、どのような隔壁法が修復処置に有効であるかは明確ではない。本研究では隔壁法の違いにより、どの程度隣接面辺縁形態に違いが生じるかについて検討した。

【材料・方法】本研究では①上顎左側第一小臼歯②上顎左側第一大臼歯③下顎左側第一小臼歯④下顎左側第一大臼歯の人工歯を使用し、事前に近心側に窩洞を形成した。検討した隔壁法としてはG1:セルロイドストリップスとウッドウエッジを用いる方法G2:部分的に切除したメタルストリップスをウエッジで圧接する方法G3:トッフルマイヤーを使用する方法G4:オートマトリックスバンドを使用する方法G5:セクショナルマトリックスとリングクラスプを使用する方法を検討した。コンポジットレジン充填後に隣接面部の充填状態を実体顕微鏡にて観察した。

【結果】G1, G2では、隣接面は平坦な形態を呈しており、コンタクトの再現ができでいなかった。また一部の試料では歯頸側辺縁部が過剰に充填されていた。G3では、G1, G2に比べ、隣接面部の豊隆は若干再現できていたが、コンタクトの再現は不明確であった。G4では、G1からG3より隣接面部の再現性が良かったが、隣接面辺縁部に過不足が生じやすい傾向であった。G5では、隣接面部のコンタクトの再現性が最も優れていた。また隣接面辺縁部の過不足もほとんど認められなかった。

【考察】セルロイドストリップスや切除したメタルマトリックスを使用する方法では、隣接面部の豊隆やコンタクトの再現が困難であることから、これらの方法による隔壁は避けるべきである。トッフルマイヤーの使用では、若干の豊隆は隣接面部にできるものの、前記2法と同様に面状の再現になり易いので、使用には注意が必要である。オートマトリックスバンドの使用では、隣接面部の豊隆はつけ易いが、隣接面辺縁部が過剰充填になる可能性もあるので、ウエッジの圧接状態を十分に留意する必要がある。セクショナルマトリックスとリングクラスプを使用する方法が最も再現性に優れていたことから、本法が隔壁法として最も適しているものと考えられる。